

甲陽だより

発行所
 西宮市甲子園高麗町3番7号
 甲陽学院同窓会
 電話西宮(0798)41-6622番0623番
 郵便番号603
 印刷所 清
 集人 原 印 刷 所
 石川印刷出版社
 神戸市兵庫区中山通3丁目3-6
 電話神戸(078)575-3765(代)

新世紀への発進

甲陽学院同窓会会長 原 清

その日は朝から小雨けむる暗い日でした。「学校法人辰馬育英会甲陽学院理事長辰馬修一氏葬儀場」哀しい標示板が雨にぬれてい

る。西宮市の橋会館前にはテント張りの弔問受付が作られ、喪服、喪章に沈痛な顔をした係員たちが並び、場内から流れてくる説教の声に肅然として頭をたれていました。場内一ぱいに参列した葬送の人たち。場外に焼香を待つ人たちの傘の群れ。人びとはみな故辰馬理事長の人柄を語り、功績をほめ合っている……それは哀しい盛儀でした。

そして私は、この盛儀を目のあたりに見ながら、静かに過ぎしかたを振り返り、甲陽学院も建学今や六十年、いま一つの大きな転機を迎えていることを、あらためて、しみじみと感じました。

正確には大正六年二月、当時の異色教育家・伊賀駒吉郎氏が理想教育への情熱をもやして創立した私立甲陽中学は、その後、辰馬吉左衛門氏の協力により、財団法人辰馬学院の経営にうつり、名実ともに天下の甲陽中学校として旧制時代の中等教育界に不滅の金字塔を打ち樹てたのです。

大正、昭和の経済恐慌もくぐり抜け、戦争

の荒波にも耐え抜いた。そして、今では日本有数の進学校として光り輝き、その間、多くの有名人、実力者を世の中へ送り出したのです。卒業生の数は、もう一人を突破しています。

しかし、学校周辺の環境も一変しました。かつて枝川の清流と白砂青松を誇った校舎の外周も、騒音と排気ガスの吹きだまりとなりました。

この現況に、逸早く校舎移転を提唱されたのは辰馬家です。騒音街から脱出して甲山麓の静かな高台地へ集団移転、これは、しかし言うは易く、行方に難い大事業です。土地と開拓と予算と金融。その一つ一つを解決してゆかねばなりません。

しかし、冒頭に「さいわい辰馬家の所有地がありますから……」と、いとも無難作に、先祖伝来の土地提供を申出られたのに勇気づけられ、関係者一同の移転作業は着々と進みました。現場が保安林であるための厄介な手続き、バス道路の開設、設計、施工など急ピッチで進行。もう大丈夫、いよいよ来年には待望の校舎移転というゴール寸前に、借しくも辰馬理事長の急逝です。

あれほど熱心に、あれほど楽しみに、校舎移転を待望していた理事長が、その晴れ姿を見ずに亡くなられたことの残念さ。さぞかし心残りだったであろうと思うと、今も私たちの胸は痛むのです。

でも、徒らに嘆き、哀しむことだけでは、この事業は進歩しない。かえって故理事長の御志に背くことになると思います。私たちは涙をふるって立ち上らなければなりません。ああ、その日を待たずして、遠く去られた故理事長の霊を慰めるためにも、そしてわが

甲陽学院同窓会

— 夏季大会御案内 —

8月21日 (土曜) P.M. 2:30
 於: 甲陽学院高校



甲陽学院が、新世紀の第一歩を力強くふみ出すためにも、私たちは改めて一層の努力と奮闘を誓い合うべきときなのです。

甲陽学院にとって、枝川時代の舞台面は、いま静かに裏側へまわりはじめ、替りに輝やかしい甲山時代の新舞台面が私たちの目の前に現れようとしています。

世代が大きく変わろうとしています。

同窓生一人、今こそ心を新たに、この新世紀への舞台転換に、敬服と絶賛の拍手を送ろうではありませんか。

- ◇日時 八月二十一日(土) 午後二時半
 - ◇場所 母校 甲陽学院高等学校 講堂および体育館
 - ◇会費 一般会員 二千元 学生会費 千円 特別会員今春卒新入会員 無料招待
 - ◇申込 準備の都合がありますので、なるべく早目に同封の振替用紙で、年会費共々御申込御送金下さい。
- 今夏も、甲陽学院同窓会を右記要領にて行ないます。
- 例の如く、飲み放題、食い放題、その上今回は、ゲストとして人気作曲家キダタロー氏の来演が決定しています。(第二面参照)
- 暑い盛りではございますが、ふるって御参加下さるようお願いいたします。

発想法のちがい

甲陽学院 高等学校 校長
小河 清 磨

問答という何かしつかつめらしい言葉だが、どこにでも、そのような情景は見受けられる。学校の教室内で、また街頭で、家庭内でも。そのようなものうちに、近時我々の耳目をあつめたものに、ロッキード事件での証人や参考人の喚問のテレビ中継の場面がある。この中継場面を聴いていて、いつも終り頃には、何かいらいらした気分になるのは私だけなのだろうか。殊に答える人が、日本人でないときなど、一層その答弁が、そつけない、問題の焦点がどこなのか、どうなっているのか、誰か解説でもしてくれないと、わからないまま終つてしまふ。このような一問一答を、傍から聴く者には、何かはがゆいものが残るよう思える。質問者は、自分の意図する方向の十分な答弁を得たのであろうかなどと考えているうちに終つてしまふ。

さて先日届いた小冊子に、こんな記事があった。真の国際交流のために題された東京大学のフランス文学教授小林善彦先生の一文である。その一節を借用させていただく。フランスに留学希望の学生達を、フランス人の試験官が口述試験をする場面を想定し、一問一答のやりとりの例である。

とにかく彼等のいわんとすることは明快であり、読まれた方も、この学生のフランス留学の希望の様子をよく理解できると思う。

ところが、このような問答を何度か繰り返すうちに、実にしばしばフランス人の試験官がいらいらしてきて、不機嫌になる。なぜだろうと思つて尋ねてみると、驚いたことには、学生たちはどうも私の質問が求めていることに、直接的に答えない、という返事はこうだった。「何のためにフランスへ行くのか」と聞いているのに対して、「私は教養部の学生の頃から……」など、どうでもよい事から説き起して、長々と話し、最後になってやっと、こちらの問に答えるのが理解し難いという。それならフランス人だったらどのようになるかといえは、

「あなたはフランスへ行く積りですか。」
「はい、行きたいと思つています。」
「何のためですか。」
「フランス語とフランス文学の研究のためです。」
「もう少し詳しく、何を研究するのですか。」
「十九世紀の小説、とりわけバルザックの研究です。」
「どこで勉強したいのですか。」
「パリ大学です。」

以上二つの問答の例を較べて、皆さんはどう感じられたでしょう。後者の一問一答から私は、英語を習いはじめた頃の、リリッダーを読んでいようであり、一方前者も、スッキリとした順序正しい説明で、鋭い答弁のように思ひます。先ず自分の興味、関心、内的な動機を述べ、ついで現状の説明をして周りの地固めをしてから、「従つて……」という形で、結論をひき出している。唐突に強い主張をぶつければ、それが結論に導く話し方は、我々のよく使う

手法でしょう。

それが証人尋問のようになると、後者のような形となつていようである。若し後者のようなとき、質問者が、更に詳しく説明を求めない場合には、その動機なり、現状の説明なりが述べられなまま終つてしまふことになる。何も日本人の場合にはすべて前者のようになり、外国の人々の時には常に後者のようだと制限されないが、どちらかといえは私は前者の方に親しみを覚える。こんな事を考えている時に、たまたまNHKラジオの「上手な話し方の時間」という番組の中で、こんなことをいつているのが聞えてきた。「あいつは、ハッキリものをいう」という言葉は、これはその人をほめていものではない、という事は、我々日本人のものにいい方には、相手の受ける気持ちを察しながら、納得のいくように話すのがよいとされている、という風な意味のことを説明していた。

またその翌日の同じ番組の時には、外人からみたとき、「日本人は、常によくいわけをいいながら歩いている、」とみられていふというのである。耳の痛い思いがするし、かもし生れながら、身にしみついたものはどうにもならない。無理にはごとくと、本体までもそこないかねない。その発想法の違いがあるなら、我々のことも、もう少し落ち着いて、最後までじっくり聞いてから判断してくれてもよいではないかといいたくなる。ある尺度だけで測ると、あるものは全く分らなくなる。あたかも日本の尺貫をメートル法でみれば、つねに恐ろしい程半端な数字になるようなものである。しかし度量衡の単位は一つに統一できるかも知れないが、人間の意志の発想法は、真の国際交流が進めば、相互理解が生れ、まとまってくるものだろうか。前述の東京大学の小林先生の今の時点での結論は、ナンナールにもなり得ない、と。

今夏の消費法に、こんな事をとりとめもなく考えてみよいかと思つている。(6・18)

【ビッグゲスト】 夏季大会に

キダ・タロー氏来る!

さて、今年も夏季大会がやつてまいりました。昨年、一昨年とガーデンパーティ形式の野外同窓会を予定しましたが、それがごとごとく豪雨にみまわれるという恐るべき運のなさ。こればかりは、天照大神も柳原先生も如何ともしがたく、今年度は講堂と体育館で挙行する事にいたしました。

昨年は、中村鏡ちゃんをゲストに招き大変な好評でしたが、今年も昨年にひけをとらなような豪華ゲストをという事で、今や放送界狭しと活躍しておられるキダ・タロー氏に来会していただく事になりました。

ラジオでは朝日放送の「フレッシュ・九時半」や「ヤング・リクエスト」などをはじめ、辛辣な批評でヤングを歓喜させ、ソフトな話術で奥様族をしばれさせて、ヤングからオールドに至るまであらゆる層のファンを持つておられる事はあまねく知るところであり、氏は又、本職(?)の作曲家としても大活躍中であります。

只今のところ、企画委員の方では、体育館にピアノを入れ、キダタロー氏の巧みなお話を軸に、同窓会員や甲陽の先生方の美声なども盛り込み、題名などもろろない珍音楽会のようなものを予定しております。ハプニング、飛び入り大歓迎。若気の至り結構。〇〇の冷水更に結構。我と思わん方は遠慮なく、珍芸秘芸御披露下さい。

晩夏の曇りがり、旧友新友級友親友、老若男女(?)入りみだれて、楽しく飲み歌い踊り狂いましよ。何とぞ御期待の上、誘い合せて御参会下さい。(企画委員新卒生今西昭)

総 会 報 告

三月二十三日午後六時より、母校において理事会と総会が開催され、原会長以下四十八名の委員の出席を得て、母校同窓会発展のため熱心な討議をおこないました。

(一) 昭和五十年年度事業報告

◇主要行事

50年5月8日 夏季大会準備委員会、本年度卒業生を中心に打合せ会(七回)

7月 「甲陽便り」22号発送、夏季大会案内及び年会費納入の依頼

8月 夏季大会、前日米の台風、豪雨により運動場の使用が不可能となり、折角の計画を変更、急に会場を体育館に変更し、室内大会とする。

9月 理事会、次年度の大会、卒業生に対する記念品、委員の選考、次期名簿発行の件、年会費増額に伴う剰余金処理の件等につき審議

11月 法人、学校、同窓会三者懇親会

1月 「甲陽便り」23号発送

2月 高等学校卒業式、原会長出席祝辞、記念品贈呈、甲陽便り22・23号配布

3月 理事会、総会(委員会)

(二) 昭和五十一年度事業計画
従来の行事を継承し、次の三点を中心に会員相互の親睦と母校の発展に協力する。

1、「甲陽便り」の編集、発行により会員相互の連絡、親睦を密にする。

2、夏季大会は新卒会員の企画運営を中心に、新旧会員相互、及び母校との連絡を強める。
3、名簿の修正正につとめ、会員の住所確認に努力する。

会員あつての同窓会であるので、多数意見を反映する運営を心懸けていかねばならない。

年会費納入の促進は、同窓会運営の基盤であり、それには、会員各自の好意的協力は勿論であるが、機会ある毎に協力を促す努力が望ましい。

イ、甲陽便り……昨年度より年会費が増額されたので、印刷費、郵税等が大幅に上昇したけれども、年二回の発行は維持する。

ロ、夏季大会……時期について種々異論もあるが、新入会員による企画、運営という点、その他の事情から従来通り八月下旬が適当と思われる。

ハ、名簿発行……五年に一度位の発行が適当と思われるが、次回は、高校新校舎の新築、移転計画があるので、その記念発行としたい。

ニ、委員選出……現委員は五十周年の際、急に迫られ委縮したものであり、勤務その他の関係で不適當の向きもあるもので、各期ごとに最適任者を選んでいただければ幸甚である。

ホ、年会費……納入者が数年来限定されてきて「甲陽便り」発送部数の三分の一に満たない。せめて半数に達するように各期、クラスの会合等でよびかけてほしい。
五十年度決算報告と五十一年度予算は次の通りです。

(二) 昭和五十一年度予算書

収入之部

科目	予算額	摘要
会費	2,300,000	① 500×200人 ② 1,000×1,800人 新卒会費 ③ 2,000×200人
利子収入	180,000	
雑収入	20,000	
繰越金	450,472	
計	2,950,472	

預り金 696,000 51年度 302,500
52年度以降 393,500

支出之部

科目	予算額	摘要
人件費	782,000	毎月手当2人分及夏、冬手当、校内寸志
交通費	60,000	通勤手当其他
需要費	50,000	通信費、事務雑費
会議費	220,000	諸会費、理事会、懇談会其他
事業費	1,300,000	甲陽だより印刷、郵税其他 大会費、新卒名簿、記念品 アルバム
雑費	150,000	振替料、研修費、其他
予備費	388,472	
計	2,950,472	

本予備費の内より、特別積立金に100,000を繰入れる予定

(四) 昭和五十年度決算書

収入之部

科目	予算額	決算額	差引額	摘要
会費	1,420,000	2,132,000	712,000	入会金 440,000を含む
利子収入	170,000	175,653	5,653	
雑収入	20,000	69,530	49,530	名簿代、寄付金
繰越金	293,398	293,398	0	
計	1,903,398	2,670,581	767,183	

預り金 359,500 前納金(前年度) 336,500

支出之部

科目	予算額	決算額	差引額	摘要
人件費	550,000	605,000	△ 55,000	毎月手当、夏冬手当、校内寸志
交通費	50,000	48,380	1,620	通勤手当其他
需要費	30,000	24,137	5,863	切手、葉書、事務雑費
会議費	160,000	161,360	△ 1,360	理事会、懇談会、総会
事業費	850,000	823,037	26,963	甲陽だより(2回)、郵税其他 夏期大会、新卒名簿、記念品 アルバム
雑費	125,000	143,195	△ 18,195	研修費、振替料、慶弔費其他
予備費	138,398	15,000	123,398	辰馬先代御仏前、餞別
計	1,903,398	1,820,109	83,289	
繰越額		850,472		

特別積立金として繰越額より 400,000を積立てる。 大会収入金 283,000

辰馬修一君を偲んで

(第一回卒) 西 松 龍 一

五月二十六日の夜合田君からの電話で、辰馬君が四月二十日に倒れ明和病院に入院してゐるの知らせを受け余り突然のことに驚きました。

面会謝絶とは聞いたが、何とかお見舞してご本人を激励しました。奥様のご心労をお慰めしたいと、合田君と相談の上たまたま上阪中の宮崎武雄君を誘って早速伺ったが、お目にかかれず、宮崎君が書いたお見舞のメモを残して帰りました。

後刻奥様から電話で今日は病人の調子が良く、玉子と牛乳を摂取されたこと聞き、此の分ならばとひたすら快癒を祈ったのだが、三十一日急変してついに帰らぬ客となられ寂寥にたえません。謹んでご冥福をお祈りする次第です。



在りし日の辰馬理事長 (中央) 五十周年記念大会で

君とのお付き合いが始まったのは甲陽中学へ入学する一年前御影師範学校附属小学校でのごときで、当時君は同じ住吉村の海岸に住んでおられ、夏休みともなればお宅には自家用のボートがあったので毎日のように遊びに行き藤尾君、熊倉君等と一緒に海水浴を楽しんだものです。

甲陽に入学してからも同じ住吉からの通学で顔を合せない日は殆んどなく、放課後も同じ庭球部員として熊倉君等と一緒に夕方遅くまで楽しんだことなど思い出されます。

何と言っても当時の思い出は深く印象に残り感慨無量です。卒業後は僕が東京へ行った関係で永らく疎遠が続き、昭和五年神戸へ転動したものの昭和八年から十三年迄海外勤務になり、之に就いて戦争が始まり、君は応召したため終戦迄は殆んどお目にかかる機会がなかったように記憶します。

世間が落付きを取りもどしはじめ、甲陽会が開かれるようになってからはお目にかかることが多くなり、今は亡き藤尾君と三人で君のお宅でつきつきご馳走になり夜の更けるのを忘れぬ談話した事も懐かしい思い出の一つです。

君はいつの間にか歌沢に凝って熱心に喉を鍛えられ名取りにまでなっておられたようで、いつだったか有馬グランドホテルでの甲陽会の席で披露され大喝采を博された事がありませんが、君が此の方面にも優秀な才能を持っておられた事を脳裡に深く印象づけられたことでした。

計 報

左の方々の計報に接しました。謹んで御報告を申しますと共に御冥福をお祈りします。

- 辰馬 修一 (第一回) 昭和五十一年五月三十一日
- 西島芳之助 (第三回) 昭和五十一年四月十四日
- 森重 幹夫 (第八回) 昭和五十一年四月十三日
- 北川 清 (第二十二回) 昭和五十一年一月三十一日
- 松居 敬 (第三十六回) 昭和五十一年四月十三日
- 旧職員 齊藤 明堯 昭和五十一年四月十九日

まだまだ思い出は尽きませんが、辰馬育英会甲陽学院の理事長として永年長くしていられた君には、高等学校の移転が決まっていたのに、その完了迄は是非見届けたいと思つたのに、実現を持たずして他界された事は返す返すも残念だし、ご本人としても無か

年会費協力についてお願い

五十年年度総会にて年会費を金壹千円に改正して戴き経常費の運営に多少の潤いが出て来た次第ですが、甲陽だよりを年二回発行するに郵送料、印刷代を考えると余り感張られる状態ではないと思ふ。左に各卒業期に於ける配付数と年会費納入人員数を参考に掲げました。(五十年度未現在)これがせめて配付数と納入人員の比較が二分の一になればと念願する次第です。

過日の総会でも未納者に対しては督促をしてはと意見もありましたが、現在の状態では手数と郵送料を考えると再三はとも無理であるので甲陽だより発送の都合にお願いすることに決めました。何分善意による協力をお願いするより仕方ないことですが、各期の会合等には是非協力方を呼び掛けて戴きたいものです。尚其の節お世話なされる人を同窓会の理事に推薦方お願い致します。

今迄の理事、委員の方は五十周年のとき推薦せられた人々で現在では勤務地の関係や其

し心残りだったろうと同情の念禁じ難い思いがします。ほんとうに惜しい人を亡くしたものです。ここに君を偲んで拙文を記しました。どうか安らかに眠り下さい。合掌。

他のことで随分学校所在地より離れておられる人々もありますので、連絡其他に不便であると思われまふ。卒業期毎に中心となつて会合のお世話していただける人があると思ひますので、そのような人を是非推薦して下さい。自己で名乗り出て下さるか、同窓会側として是非お願い致します。

同窓会も資金に余裕ありますればやり度いこともあり、会員皆様の意見もどしどし取入れて行き、学校との繋りを更に綿密に行けるのです。会員皆様に重ねて育成に協力をお願いいたします。

回数	配付数	納入数
高 商 の 部		
1	79	23
2	89	21
3	60	15
4	63	14
工 専 の 部		
1	58	8
計	349	81
総計	5,873	1,699

回数	配付数	納入数	回数	配付数	納入数
1	64	36	11	71	25
2	46	20	12	60	26
3	45	15	13	76	27
4	41	15	14	67	21
5	57	24	15	82	26
6	61	19	16	77	27
7	58	18	17	67	26
8	66	28	18	79	28
9	51	21	19	103	22
10	87	27	20	158	46
11	71	25	21	136	47
12	60	26	22	135	42
13	76	27	23	161	52
14	67	21	24	98	33
15	82	26	25	120	31
16	77	27	26	15	3
17	67	26	27	67	11
18	79	28	28	64	20
19	103	22	29	9	1
20	158	46	30	22	5
計	5,524	1,618			

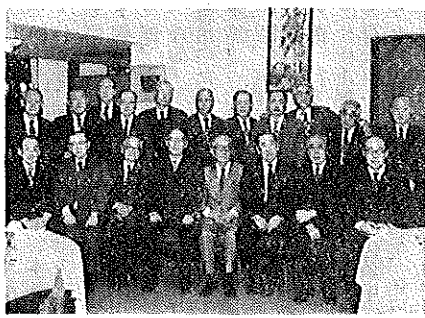
会員だより

第十三回

甲陽三三三三会

今年も亦昨年同様第十三回甲陽三三三三会を三月三日に三宮金竜閣に於て開催、今年はず年のクラス会で生存を確認出来た伊藤巖君と遙々広島市から落合(元米崎)半四郎君が参加した。

東京からは松島雄一郎君が参加予定の処仕事都合上何うしても出席出来ず、手紙で出席したのを合わせて二〇人の出席を見ました。中でも伊藤、落海両君は卒業以来四十八年ぶりで今様浦島太郎という所でした。



此の記事をお読みの七回卒の皆様何卒来年の三月三日是非参加下さい(記中嶋生)

甲 十 会

第39回

久方振りの輪番となった幹事として、ここに一言当日の所見を述べたいと存じます。

そもそも我ら甲十会の面々は、母校には大正末期入学せし同志の者々でありまして、今日現在では殆い、既に還暦を祝つてここに

三、四年を経過した年頃の者ばかりです。そのむかし青い坊主頭をふりかざした時代は、今では隈ぶよすがもなく、よそ目には聊かあわれみ破れ気味の白髪頭とひかり輝く坊主頭に変り果てた老輩連の集いとなつてしましました。

当日(50年11月初)神戸市内の布引に近く山腹の六甲荘というところ、都廳を少しはなれ、割に閑静な環境下のホテル風の会場で開催したものでありまして、会費一杯の献立てを用意して始めたものですが、出席各位よりは好評であり、かつてないほどのデラックス・ムードと豪華献立であるとの評価をうけて当番幹事としては聊か面目を施した次第であります。

定刻しばらくしてスタートしたのですが、恩師朝田先生を迎えての会場、——先生には喜寿直前としては予期以上にかくしゃくとしておられ、往年の「青年」の名前を汚すことないような元氣振りに接し、一同ただ啞然としたのでした。又、参席諸兄に於いては遠くはるばる馳せ参じてくれた森津・香川両兄の悠然たる参加振りは正に功成り実をあげた面影が偲ばれたり、他方、当会始めての参席をみた、阪東兄に対しては未だ坊主頭時代を想起されるほどの面影がそのまま、正に元氣一杯の円満居士の如く感じられました。

更に、目高、藤原、村地兄などの久方振りにみるベテラン紳士然は正に一家をなしている如く、其他出席諸兄には何れも悠々自適の感を深くしたものが感じられる次第でした。

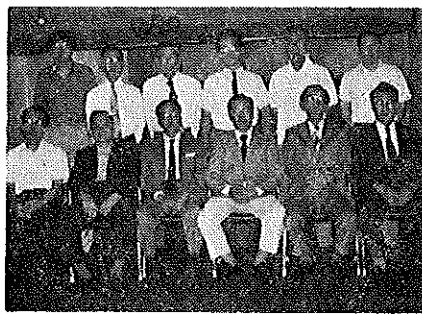
秋の夜長までには、まだ若干の時間がありませんでしたが、興趣つきることなく互いに再会を約したもので、先づ以て当会はなかなかの盛会であったという好評を蒙り、幹事としてはこの上なき喜びを感じ乍ら甲十会の繁栄を更に一同希求して万才三唱の中に閉会いたしました。(次幹事は野田、目高両兄が選任されました)(福高当番幹事)

第二十二回卒

李 陽 会

昭和十七年に卒業した私たちは、在学中の「李組」と「甲陽」の名にあやかつて、「李陽会」と称するクラス会を組織しています。

例会は年一回、担任だった松宮先生御健在の折は、毎年御出席を頂き、故北村先生、太田先生、岩佐先生にもお出でを願つて、毎回十五名から二十名の参集者をえて、今日にいたっています。



昭和三十三年から「楽雅記集」と題する会報を発刊し、この方も今年で十四号を重ねました。(下段参照)甲陽のクラス

会、定期的に会報を出しているのは、あるいは「李陽会」だけではないか、といささか自画自讃している次第です。

昭和五十年度の例会は、九月十三日に新大阪駅前コロナホテル喫茶部で開催。出席は、相井、井上、石西、入野、許、後藤、新堂、信保、田原、当津、藤井、前田、森田、吉川、の十四名、福知山からかけつけた前田君、三十年ぶりの藤井君の参加をえて、のむほどに食うほどに、五十をすぎた年も忘れて、カンガクガクとはなり、中学時代の思い出話、恩師・旧友の消息、子供の進学のこと、縁談のこと、此頃の若いもんは……とか、海外的武勇伝、老眼、血圧、糖尿、肝臓のこと

やら、ゴルフの話とつづくなかで、オイル・ショック以来いつ果てるともない不況に話が始末でしたが、秋はまだつきないうちに時間となり、会員一同の健康と、全員参加の日の一日も早やからんことを祈つて、あとは二次会へと流れていきました。(昭和五十年年度幹事、新堂、信保、当津記)

李陽会報

「楽雅記集」

№14 第一頁より

甲陽のすぐ北側を阪神電車が走っている。中学時代には線路に一番近い図書教室などかなりの騒音だった。立派な講堂なのに、音楽会にはあまりむかないなどといわれたのもそのせいだ。

しかしいまになってみると、車窓から母校を一望のもとに見渡すことができ、まことに都合がよい。通過する時間帯によって、校庭で体操をしている姿がみられたり、昼休みにサッカーをしている様子など昔のままだ。教室の窓からは、英語のリーダーをよむ声などもきこえてくる感じがする。

この頃では、全国でも屈指の進学校になったが、スポーツの方は振わないらしく、かつて全国でならした野球も、最近では一回戦で敗れることが多い。バックネットも淋しげだ。

戦後三〇年、甲子園の界隈もすっかり変わった。南運動場も大ブールも、甲子園線もなくなり、むかしの閑静な住宅地のたたずまいは、目を追うてなくなりつつある。

しかし車窓にみるかぎり、母校の校舎も校庭も中学時代をそのままに、よみがえらせてくれる。そして、その幻は恩師の面影、級友たちの顔々と重なる、暫らくは消えない。

第二十五回卒

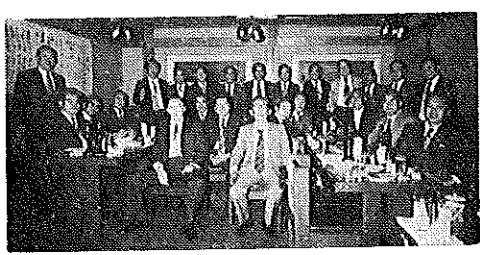
甲 桃 会

日時 昭和五十年十一月二十一日(金)
午後六時〜九時二十分
会場 バブルグリン・ザ・ジャグ(大阪、百又ビル地階)

幹事 国松久二夫、山田一郎、大塚雅也
出席者 池内竜雄、五十嵐喜芳、大西寿夫、折見政行、勝間信治、亀井量太、清田明、田中邦彦、田中桂三、谷本和三、長瀬亘、中尾博、西田実、増田忠夫、松岡泰三、松原市郎、山崎昌弘、横山吉雄、殿村収史、鰐部和夫、别当正恵、国松久二夫、山田一郎、大塚雅也

なお、芳郎先生は、出席の御予定でしたが急用のため残念ながら不参加でした。
欠席者 岩井洗、岩崎陽一、大國達治、小納弘、河南昭二郎、熊谷泰一、後藤昂、斎藤省己、高橋治、土屋久、樋口嘉章、松井二郎、行友正裕
(住所不明の方)

石本憲一郎、日下章、佐伯甲二、高橋幸夫、富永種博、細野堯正、柏原英三、根本博、岡田章、山田皓郎(在ブラジル)、本間満、山口哲三、神田欣一、大坪丞、武田弘、八田進、小松久男



なお、次回幹事は大西寿夫、田中桂三、松原市郎の三氏。常任幹事には勝間信治氏にお願い致しておりますので、今後のあらゆる連絡、相談がございましたら下記宛連絡して下さい。
勝間信治勤務先 大阪鋼管商会大阪
市西区京町堀2-20
電〇六一四四一
一四五三五

最後になりましたが、今回の甲桃会には、大切な会議を中座されたり、病氣中にもかかわらず出席された諸氏もあり、幹事と致しまして厚く御礼申し上げます。又、欠席された諸氏も来年は卒業後滿三十周年に当りますので是非次回こそは元気な顔をお見せ下さい。

住友電気工業

甲 陽 会

75年度の住友電気甲陽会が、去る7月28日、同年4月入社の高階、中堀両君の歓迎会を兼ね、大阪の住友クラブで開催され、10名が出席した。
住友電工の甲陽会は、会社内にあってもめづらしい高校の同窓会として、中村博二先輩(35年卒)の尽力により、73年6月初めて開かれたもので、今度で三回目、会員数も、高階、中堀の両君を加えて21名となり、今後の増勢が期待(?)されております。

当日は、現在横浜に勤務されている発起人格の中村先輩もたまたま仕事で大阪中から出席されるなど、計10名が集まりました。会は、出席者中(おことわりしておきます)最年長の小松啓七先輩の首頭で乾杯した後、各自の近況報告(新入社員は自己紹介も)を行なった。話はずみ、「君と俺は同じ先生だな、と言うことは六年いや十二年ちがう訳か、うむ……」等と感心したり嘆いたりする年長組が「あの先生(名前はふせておきます)は恐しかった。よくおこられたものだ」と言うなど、後輩から「いやそんなことはないですよ。」とやで年長組「先生も年をとられたからな」とやると、後輩「我々が優秀だからでしょう。」とやり返すなどまたたく間に予定の二時間が過ぎてしまいました。

今回は、予定が急に決まったこともあって母校から先生にお越し頂くことができませんでしたが、来年は、どなたかお越し頂いてまた集まろうと言うことで散会しました。
その後、入社後の各種実習を終えた高階君は関東製作所(栃木県鹿沼市)に、中堀君は伊丹製作所に勤務することになり、11月より

元気に活躍中であります。
最後に、当日の欠席された方の内、多田英昭氏(38年卒)は、現在、ニューヨークに勤務され、第一線では元気ががんばっておられ、住友電工甲陽会の独身会の会長としても健在です……?また、元応援団長でありこうした会合に欠かすことのできない川淵秀和氏(38年)氏は、足の怪我で加療中の為、欠席されたことは残念でしたが、氏は8月25日の同窓会当日には、見事司会の大役を果たされ、すばらしい声を多くの出席同窓生の前で披露されましたことを付記しておきます。

当日の出席者は次の通りです。()内は卒業年。
小松啓七(34)、中村博二、吉田興一(35)、上田省三(36)、鎌名林利彦(41)、大塚昭(42)、中山平敏、高階誠、中堀知(44)、磯島茂樹(45)。(以上中山、磯島記)

会員名簿整理

次の方々は二月発送した甲陽だより二十三号が住所変更で返戻になった方です。善意に年会費を納付せられていた貴重なお金を無駄費いとせまいよう、お互いに協力をお願い致します。今回も一八通ありました。

- 第七回 梅田俊平
第八回 静敬三
第九回 小泉清
第十回 浪川克己、小川彌、町田健次郎
第十一回 古川五郎
第十二回 紀平竹雄
第十三回 川口宏平
第十四回 工東太一、門永通夫
第十五回 丸岡清兵衛、福島良郎
第十六回 和田信美
第十七回 長滝一郎、細川健児
第十八回 讀井正敏、木沢利夫、村田収、大仁平八郎
第十九回 坂井輝夫、奥野義一、田部金之
第二十回 轉 浅香晃

- 第二十二回 中村好一、菊池俊和
第二十三回 阪口謙三
第二十四回 谷内芳治
第二十五回 古塚雄策、米原豊光、菅原光誠
第二十六回 大沢安隆、望月信彰
第二十七回 増田勝行
第二十八回 吉岡日佐吉
第二十九回 坂本賢三、浦上一信
第三十回 有田和男
第三十一回 吉村隆
第三十二回 林 佑吉、安藤幸来、逸見隆二
第三十三回 岡 映宏、広田秀美
第三十四回 梶 康弘
第三十五回 福井健二郎、太田哲次、原謙三
第三十六回 中島孝司
第三十七回 吉沢正貞、飯 滋、中川博二、島住幹夫
第三十八回 吉田淳二、島田忠幸、藤田紀久
第三十九回 田城英樹、小林昌則、松宮正幸
第四十回 新藤充光、大辻孝雄、加藤絃一
第四十一回 中川 洋
第四十二回 川越武博、平野敬則
第四十三回 大西勝也、秋山正孝、南 聡
第四十四回 滝山和彦
第四十五回 浅井信雄、小川弥寿平
第四十六回 和田隆吉、森本敬司
第四十七回 大関直二、福田雅夫、山本 宏
第四十八回 服部 與
第四十九回 藤田徹雄、山下達生、松本 信
第五十回 入谷一成、加藤和俊、金谷三郎
第五十一回 三輪大成、馬淵宏之、登 義人
第五十二回 浦長頼隆
第五十三回 石井孝司、山下桂二
第五十四回 植田邦彦、河本俊樹、津村一隆
第五十五回 林 良樹、伊沢弘文
第五十六回 奥村一樹、西原正治、伊藤 彰
第五十七回 長谷川 勉
第五十八回 赤松和彦
第五十九回 吉田健児、三代和史、井上俊和
第六十回 村山雅彦
第六十一回 久角 武、柴田順三郎
第六十二回 川北幸一
第六十三回 川上輝彦

同窓会新役員名簿

	卒業回数	氏名	卒業回数	氏名	卒業回数	氏名
会 長	5	原 清	22	田 中 敏 失	7	川 合 秀 雄
副 会 長	8	友 国 説 郎	23	卜 部 高 史	8	和 田 亮 三
	15	高 垣 雄 二 郎	24	勝 部 寛 治	8	薄 田 桂
	36	藤 井 保 男	29	清 水 昭	9	日 下 秀 郷
高商	1	桑 田 正 造	31	坂 上 紀 元	9	香 野 益 三
相 談 役	1	宮 崎 武 男	32	河 合 仁 仁	9	岡 田 順 一
	1	合 田 孝 治	34	江 隈 一 夫	9	西 邑 昌 一
	1	西 松 竜 一	34	高 木 章	10	井 上 忠 男
常 務 理 事	13	山 田 隆 晴	37	奥 野 汎	10	白 川 光 男
	17	宮 本 茂	38	鶴 田 和 成	11	野 田 正 男
	20	柳 原 博	39	森 忠 彦	11	山 上 史 郎
	22	中 島 久 峯	41	橋 本 久 義	11	藤 原 陸 彦
	23	吉 井 良 峯	41	森 本 正 義	12	石 井 禎 一 郎
	35	中 村 光 成	44	中 野 忠 夫	12	伊 田 清 之 助
	36	田 村 真 也	44	川 淵 秀 和	12	三 田 周
	46	井 上 良 二	46	尤 芳 才	13	永 吉 元
	46	勝 村 弘 也	47	広 部 一 彦	13	柳 原 良 平
常 任 監 事	17	堀 建 二	48	植 田 千 裕	14	浜 辺 悟
理 事	1	野 辺 順 一	50	西 内 博 郎	14	木 村 一 兄
	1	井 関 美 駿	54	青 山 仲 郎	15	野 草 俊 作
	2	立 花 達 藏	55	水 杉 誠 也	15	五味 千 吉
	2	金 谷 熊 雄	56	平 岡 大 吾	15	山 田 宏 爾
	3	村 上 吉 胤	57	今 西 昭	16	高 橋 慶 男
	4	山野井 萬 雄	高商 1	柏 井 健 一 夫	16	古 田 敬 三
	5	矢 島 孝 雄	高商 2	名 村 英 夫	16	石 井 武 四 郎
	6	山 口 興 一	高商 3	大 国 盛 治	16	塚 本 慶 太 郎
	7	金 沢 幸 雄	高商 4	酒 井 新 介	17	田 口 恭 平
	7	中 島 清 之 助	1	土 居 信 三 郎	17	樽 井 幾 太
	8	浜 田 武 三 郎	1	長 谷 川 悟 一 郎	18	本 間 隆 一
	10	野 田 徳 太 郎	2	永 井 次 郎	18	吉 井 良 隆
	11	中 沢 栄 一	2	高 橋 善 雄	19	和 田 久 弥
	12	菊 池 典 雄	2	森 田 定 雄	19	丸 山 喬 一 郎
	14	中 島 邦 雄	3	栗 田 修 作	19	市 川 新 也
	15	朝 倉 元 三 郎	3	森 竜 一	20	杉 岡 健 児
	18	山 田 叔 弘	4	酒 井 良 一 平	20	北 本 正 茂
	19	武 田 可 一	4	曾 根 義 良	20	藤 木 武 彦
	19	橋 本 恭 一	5	有 沢 良 一	21	当 津 武 禎
	20	佐 野 定 敏	5	藤 原 研 義	21	井 上 佐 英
	21	浜 口 博 章	6	小 野 西 二 郎	21	遊 佐 能 弘
	21	長 村 卓	6	中 西 二 郎	22	笠 置 能 弘

委 員

委員	卒業回数	氏名	卒業回数	氏名	卒業回数	氏名
	22	道盛秀明	38	逸見真二	49	亀井健
	22	前川陽一	38	浜根恒夫	50	矢野厚
	23	塚本圭三	38	柴田始宏	50	太田元
	23	中川経治	39	河守哲夫	50	曾我部俊
	23	朝田修平	39	田村坦之	51	川口辰郎
	23	小林文夫	39	辻村勉行	51	波多野昭博
	23	小林寧樹	39	福井敏安	51	清水隆
	24	小林立正	40	古瀬安紀	51	中松隆
	24	宮本幸次	40	南野勝	52	藤井良
	24	殿村和洋	40	吉田淳二	52	山下久一
	25	世良和明	40	篠田勝郎	52	池田雅一
	25	山中保典	41	梶原広彦	52	小野木敏
	26	関本昭典	41	浜崎康	53	足立謙修
	27	米原豊充	41	前田和秀	53	安達田一年
	27	吉野建二	42	宮崎清志	53	池田木謙
	28	黒川省吾	42	花木国繁	53	青木日隆
	28	野田康雄	42	友国紘一郎	54	朝合和
	28	井阪嘉昭	42	下井基安	54	合部淳一
	30	小山昭次	43	波谷義信	54	安中利男
	30	小二雄	43	本庄重利	55	中相原康
	30	三浦邦夫	43	鈴木徹	55	相原隆
	30	津路安博	44	梶山部嘉弘	55	菅山防正
	31	近藤真喜雄	44	山朝子芳三郎	56	周五百藏
	31	荒蔵和男	44	朝小西義一	56	五百谷宗平
	31	黄楊荒雄	45	森本島弘	56	信奥田明
	32	信保一隆	45	中高谷徹	56	奥池田茂
	32	吉村靖民	45	高米田雅哲	56	池田内弘
	32	石合上吉	45	米田三真	56	山内野山
	32	池善野史	46	岡田真	56	岸野山
	33	辰馬宗信	46	津田本口	56	横中谷景
	34	年森博幸	47	倉野本口	57	中久良一
	34	花房勇三郎	47	野々村雅	57	佐久良一
	35	中浜恒雄	47	野々村本	57	伊沢内瑞
	35	三木正之	47	岡崎智仁	57	伊山垣建
	35	沢井順平	47	山越田昭	57	堂阿部浩
	36	大西山明	47	越柴田	57	阿部林良
	36	西山英雄	48	山北田真	高商 1	小山本甲
	36	陶山英進	48	北田真	高商 2	小山原英
	37	鉄山敏治	48	大山塚	高商 3	高国領秀
	37	沢井光勉	48	大山中	高商 3	高国領秀
	37	安井一	49	山池上	高商 4	高国領秀
	37	新井一	49	池上	高商 4	高国領秀
	38	西田武史	49	栗飯原篤	高商 4	高国領秀